夏越の大祓のご案内

六月の晦日、恒例の夏越の大祓（おおはらえ）並びに茅の輪くぐりの神事を斎行します。

古来我々の先祖は、毎年六月晦日・年末に「大祓」によって心身を清浄にし、新しい年の幸せを祈願しました。新しい一年の一層の「幸せ」のご縁をお授かりになりますようご案内申し上げます。

尚、本年は新型コロナウイルス感染防止を考慮しまして、規模を縮小し、特別な対策を致します。

斎行に際しまして殿内に入らずに屋外での実施、参列者のマスクの着用、適正な社会距離の確保、混雑解消のため複数日に振り分けて実施などの感染症対策を講じて実施しますのでご理解ご協力願います。

また、ご参拝の叶わない方、少しでも風邪の症状のある方、健康に不安のある方はご参集をお控え頂き、郵送でお申込み頂きますようお願いします。

（大祓の郵送祈祷は送料不要）

斎行日（予約不要・どなたでもご参加いただけます）
六月二十八日（日）　午後三時
六月　三十日（火）　午後六時
七月　五日（日）　午後四時

玉串料　三〇〇〇円（一世帯）
授与品　茅の輪
　　御神菓（美保岐金平糖）

※緊急事態宣言の延長など社会的な事情に鑑み、急な変更もございますので予めご承知おき下さい。公式サイト・占いメールでも随時詳細を告示します。

夏越の大祓とは

大祓神事の歴史は古く、大祓詞（中臣祓）は平安時代の「延喜式」（九二七年）に記載され、古代豪族の中臣氏が司る宮中行事でもありました。

人が生きる上で知らず知らずのうちに犯した罪や穢れを取り除き、疫病や災厄を避け心身を清らかにすることを祈念した神事です。とりわけ生と死が身近であった中世においては重要な意味合いをもっていたと考えられます。

わけても、江戸時代以降はこの六月の梅雨の時期に合わせて疫病・災厄除けを祈願した茅の輪くぐりの神事が広く江戸の庶民に広まったとされ、日本中で行われる伝統行事となりました。

当分祠でも毎年欠かさず斎行する恒例行事であり、大きな茅の輪を手作りで製作しております。

特に本年はいち早くの疫病封じ・感染収束並びに健全な社会生活の快復をご祈念申し上げ、期間を延長してお飾り致します。

社頭頒布〔一〇〇〇円〕

《茅の輪くぐりの作法》

「みな月の夏越の祓えする人はちとせの命のぶといふなり」

この和歌の起源を遡ると、寛弘三年（一〇〇六年）頃編纂の『拾遺和歌集』に「題しらず」「よみ人知らず」として記されており、当時より高い注目があったことが読み取れます。

茅の輪をくぐる時は、古式豊かな抑揚で大祓の和歌を唱えながら三周まわることが作法とされます。茅の輪くぐりの神事を終え、例年は殿内で大祓式を執り行いますが、本年は境内（屋外）にて十分に広がり大祓詞を神職が唱和します。

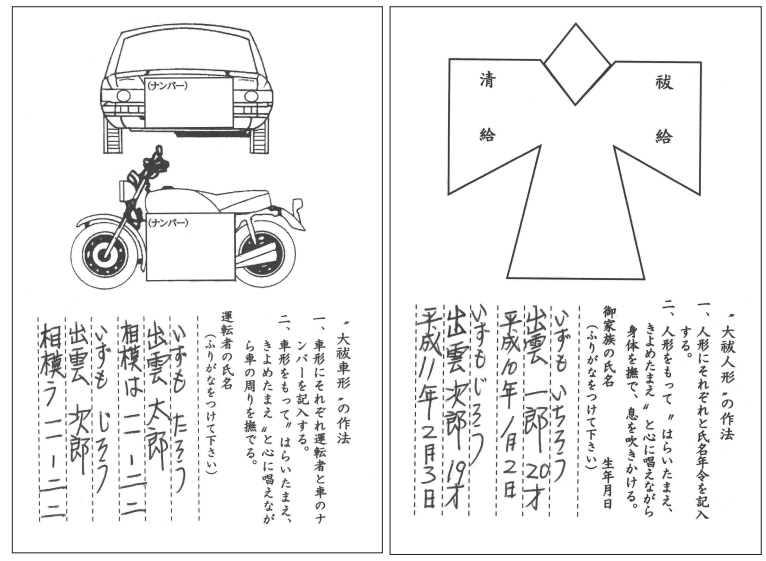
ご参列の皆様におかれましては飛沫感染防止の為、マスク着用と心の中で一緒に唱えて頂きますようご案内致します。過密にならないように六月三十日前後に複数日に分けて大祓の神事に取り組みます。

当日参加の方は受付での混雑防止の為、お早めにお越し下さいませ。

【ご来社される場合】
当日ご参列の方は人形（ひとがた）・車形（くるまがた）をご準備の上、玉串料（三千円）を添えて授与所・受付までお越し下さい。
（予約不要・当日参加可）

【当日不参加の方
・郵送される場合】
当日ご参加できない方は事前にお預かりの上授与品をお渡しします。人形・車形・玉串料を封筒に入れてご持参下さい。郵送・郵便振込・代引きにてのお申し込みも可能です。後日、記念の縁起物を発送致します。

〔一〇〇〇円〕



大祓人形記入例

大祓車形記入例

人形・車形の使い方

古くより禊や祓をする際に、人間の身代わりとして人形を用いてきました。

当分祠では夏冬の大祓の際に、人形（ひとがた）・車形（くるまがた）を用意し、それらを形代（かたしろ）にして自らの罪穢れをうつしお祓いします。

人形の紙に住所・氏名を記入し、息を三回吹きかけ、頭から全身気になる場所を撫でこすり、悪い気を取りうつしてお祓いします。

車形に住所・氏名・ナンバーを記入し同様に自家用車、バイク・自転車などの四方を撫でこすって罪穢れをお祓いし当分祠にお納め下さい。

大祓の神事の際、身代わりとしお祓いし、後ほど忌火でお焚き上げします。

なんで茅の輪をかざる？

その答えは神話―『備後国風土記』（和銅六年（七一三年）奈良時代初期に編纂）に伝えられております。鎌倉時代中期、卜部兼方によって記された『釈日本紀』に、「備後国風土記逸文」として「蘇民将来」の逸話が伝存している。諸説あるが一般に次のように伝えられている。

・・・・・・・・・・・・・・・

武塔（むたふ）の神が、旅をしている途中、蘇民将来、巨旦将来という兄弟に宿を求めたところ、弟の巨旦将来（こたんしょうらい）は裕福であったにも関わらず宿泊を拒んだのに対し、兄の蘇民将来（そみんしょうらい）は貧しいながらも喜んで厚く饗しました。その数年後、再び蘇民将来のもとを訪ねた武塔の神は「私の名は素盞嗚神（すさのおのかみ）である。もし悪い病気が流行ることがあった時には、茅で輪を作り腰につければ病気に罹らない」と教えられました。そして疫病が流行したときに巨旦将来の家族は病に倒れましたが、蘇民将来の家族は茅の輪で助かったというのです。

この言い伝えから「蘇民将来」と書いた紙を門に貼るという信仰が生まれました。茅の輪も当初は伝説のとおり小さなものを腰に付けるというものでしたが、江戸時代初期になり、大きな茅の輪を潜って罪や災い、病を取り除くという神事になったと言われております。

神話を読み解く

様々な地域で昔話として伝えられたこの神話を読み解くことで当時の人々の切迫した祈りや死生観がわかります。諸説解釈がありますが、神様に茅の輪をもらって助かったという部分は共通しますが、最も古いとされる備後国風土記の伝承では、茅の輪を渡された夜、疫病から助かったのは蘇民将来の娘だけであり、巨旦も蘇民将来も、この物語に関わる全ての村人が悉く病でこの世を去ってしまいます。結びに神様より、「後世茅の輪を着けて蘇民将来の子孫と名乗れば疫病の難から免れるだろう」と諭される結末ですが、あまりにあっけない結末に得体のしれない後味の悪さを感じます。当時の人々にとって一度疫病が発生してしまえば集落全体が一夜で死に絶えることもある大変な死活問題であったことが分かります。ワクチンのない時代の疫病に対する先人の恐れや無念さが祈りとなって神話に伝えられているのです。同時に人の助け合いの大切さも伝えるものです。神道の信仰の根源とは人間の力を超えた事象や自然のはたらきに対し、恐れや畏敬の念をもって崇め称えたものと考えられます。物語の中ですら神様の力に頼っても簡単には疫病から免れられないことからも当時の人の疫病に対する恐怖と、疫病除けの祈りが切々とみてとれます。